

在籍校名 豊前市立八屋中学校
職・氏名 教諭 梶屋 允志

研 修 報 告 書

このたび、長期派遣研修員として、下記のとおり研修をしましたので報告いたします。

記

1 研修種別

D 福岡県教育センター研修員

2 主題研修について

研究主題 自己有用感を実感することができる生徒を育む授業づくりの研究

－「コネクション3」を位置付けた保健体育科学習を通して－

(1) 研究のねらい

ア 課題の背景

1,000人当たりの不登校生徒数が増加傾向にあることは全国の喫緊の課題であるが、福岡県は全国平均を上回っており、一層その対策が求められている。生徒指導提要(改訂版)では、自己存在感の感受を促進する授業づくりとして、自己有用感を育む工夫が求められている。また、生徒指導リーフ(Leaf. 9)では、自己有用感が高まることで不登校生徒数の減少につながったことが報告されている。これらのことから、不登校生徒数が増加傾向にある在籍校においても、生徒が自己有用感を実感できるようにする取組への工夫が必要であると考えた。また、私自身の指導を振り返ると、生徒指導とは問題行動に対応することと捉え、自己有用感を育むことなど生徒指導の実践上の視点を意識した授業づくりが十分ではなかった。さらに、在籍校において、自己有用感を育むために必要な教師による居場所づくりと生徒による絆づくりの実態を調査した結果から、授業での居場所づくりと絆づくりの活動が、生徒の自己有用感の実感に繋がっていない実態が明らかになった。これらの背景から、授業において自己有用感を実感することができる生徒を育むことが重要であると考え、本主題を設定した。

イ 研究の目的

自己有用感を実感することができる生徒を育むために、「コネクション3」を位置付けた保健体育科の授業づくりの有効性を検証する。

ウ 研究の仮説

「コネクション3」を保健体育科学習の一単位時間に位置付ければ、自己有用感を実感することができる生徒を育むことができるだろう。

(2) 研究の構想

ア 主題の説明

(ア) 主題について

生徒指導提要(改訂版)では、「自己有用感」について「他者のために役立った、認められたという自己有用感」と示されている¹⁾。このことから本研究における「自己有用感を実感する」とは、自分が他者の役に立ったという貢献や、自分が他者から認められているという承認を自覚して感じている状態と捉える。よって本研究においては、「自己有用感を実感することができる生徒」を、貢献と承認を実感する姿で捉える。

- 他者や集団に対して、自分が役に立てたと感じた行動を明らかにしたり、役に立てたことを前向きに受け止めたりしている。 【貢献感】
- 他者や集団からの感謝や称賛の言葉を前向きに受け止めている。 【承認感】

「自己有用感を実感することができる生徒を育む授業づくり」とは、学習活動の中に、生徒が自己有用感を実感できるようにするための、教師の働きかけや生徒の活動を位置付けることである。

(4) 副題について

「コネクション3」とは、生徒相互の関わりを促進するために、1単位時間の授業の導入段階における生徒が貢献と承認の見通しを持つことができるようにするための教師の働きかけ（アプローチ1）、展開段階における互いの考えや知識を伝えたり協力して運動したりする生徒の活動（アプローチ2）、終末段階における他者の役に立てたと感じたことを自己評価したり他者と認め合ったりする生徒の活動（アプローチ3）のことである。この「コネクション3」を展開することで、生徒が互いに関わり合いながら、一人一人が貢献や承認を実感することができると思う。また、保健体育科で育成する資質・能力には、生徒指導提要で示されている生徒指導の実践上の視点が位置付けられている。これらのことから、本研究で「コネクション3」を1単位時間の授業に位置付けることは、学習のねらいに迫る際に、教科や領域といった異なる学習の環境や形態においても、自己有用感を育むことができるのではないかと考えた。

イ 研究の内容

(7) 研究の具体的構想（図1）

実態調査によると、本研究の実証学級は自己有用感が低く、日々の生活にストレスを抱えている生徒が多い実態である。加えて、中学校学習指導要領解説保健体育編では、体育分野「体づくり運動」の内容の取扱いについて、保健分野「ストレスへの対処」などとの関連を図った指導を行うものと示されている。さらに、体づくり運動の目標には、仲間の学習を援助しようとすることや分担した役割を果たそうとすること、欲求不満やストレスへの対処の目標には、自他の健康に関心をもつことが示されている。これらの目標の達成とともに、生徒が自己有用感を実感するためには、生徒が互いに関わり合うことが必要である。そこで、生徒が心身の健康の保持増進に向けて関わり合う教材化の工夫として、まず、「欲求不満やストレスへの対処」において、自他のストレスへの適切な対処方法に関心をもったりその知識を活用したりすることができるようにする。次に、その対処方法の実践として、運動で関わり合う「体ほぐしの運動」で心の状態の改善を図る。最後に、「体の動きを高める運動」を協力して学習することで、生徒の関わり合いを段階的に充実させながら、心身の健康の保持増進を目指すことができるように単元を配列する。このように、保健分野と体育分野の相互の関連を図って心身の健康の保持増進を目指す授業に、アプローチ1～3を位置付けることによって、貢献と承認の実感をねらうこととする。

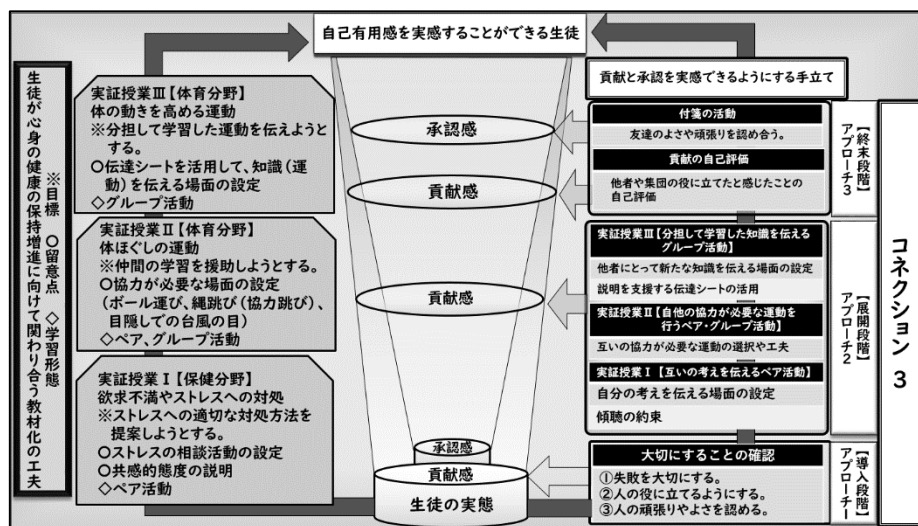


図1 研究構想図

導入段階で、生徒が貢献と承認の見通しを持つことができるようにするための教師の働きかけとして、授業で大切にすることを確認する。（図2）

(4) アプローチ1

導入段階で、生徒が貢献と承認の見通しを持つことができるようにするための教師の働きかけとして、授業で大切にすることを確認する。（図2）

(4) アプローチ2

実証授業Ⅰでは、生徒は互いの考えを伝えるペア活動に取り組む。教師は、活動の留意点として、生徒が自分の思いや考えを伝えやすくするために傾聴する約束を確認し、自分の考えを伝える場面を設定することで貢献の状況をつくる。実証授業Ⅱでは、生徒は自他の協力で成立する運動を行うペア、グループ活動に取り組む。教師は、活動の留意点として、互いの協力が必要な運動を選んだり協力が必要となるようにルールを変えて取り組ませたりすることで貢献の状況をつくる。実証授業Ⅲでは、生徒は分担して学習した知識を伝える活動に取り組む。教師は、活動の留意点として、他者に知識を与えることができるようにするために、他者にとって新たな知識を伝え合う場面を設定することや、生徒が自分の知識を伝えやすくするために伝達シートを活用できるようにすることで貢献の状況をつくる。(図2)

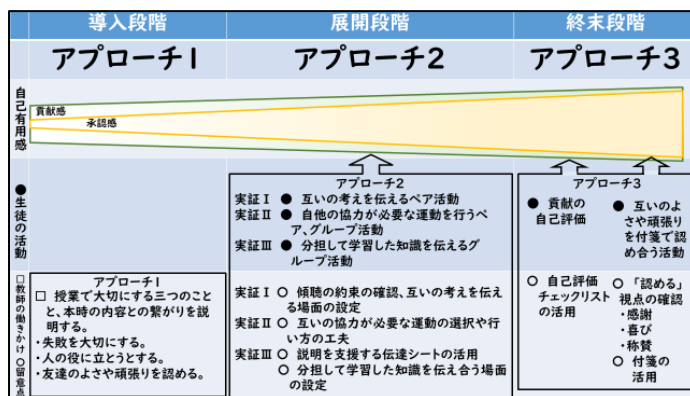


図2 コネクション3の構成

(1) アプローチ3

終末段階で、生徒は他者の役に立てたと感じたことを自己評価する。教師は、活動の留意点として、自己評価チェックリストを活用する。自己評価をチェックリスト形式にして可視化することで、生徒がアプローチ2における自分の行動を貢献の行動として捉えることができるようにして、貢献の実感をねらう。そして、生徒は共に活動した他者のよさを付箋に書いて認め合う活動に取り組む。教師は、活動の留意点として、認める視点を確認した上で付箋を活用することで、生徒同士がよさや頑張りを認め合えるようにして、承認の実感をねらう。(図2)

(4) 検証の方法

検証は、実証授業毎の前後に行った、授業での貢献、承認の見通し、貢献感、承認感に関するアンケート(4件法)、生徒の発言や行動、学習プリントの記述、生徒へのインタビューの分析で行う。また、事前調査において、貢献感、承認感が低かった生徒Aを抽出生徒とし、その変容を分析する。

(3) 研究の実際(対象:A市立B中学校第1学年C組28名)

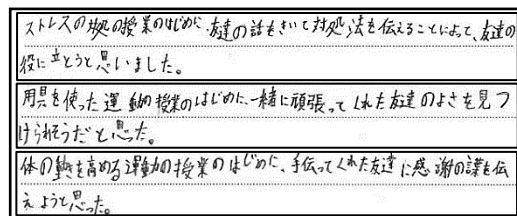
ア 実証授業Ⅰ～Ⅲにおけるアプローチ1の実際と考察

(7) 実際

実証授業Ⅰ～Ⅲの導入段階で、生徒が貢献と承認を意識して学習に臨めるようにするために授業で大切にすることとして、「失敗を大切にすること」「人の役に立とうとすること」「友達によさや頑張りを認めること」を確認した。

(4) 考察

生徒Aはアプローチ1を受けて、友達の役に立とうと思ったことや、友達によさを見つけたら感謝を伝えたりしようと思ったことを授業後アンケートに記述しており、貢献や承認の見通しをもつことができていた(資料1)。これらのことから、導入段階にアプローチ1を位置付けたことは、生徒が貢献や承認の見通しをもつことができるようにするために有効であったと考える。



資料1 生徒Aの貢献と承認の見通し

イ 実証授業Ⅰにおけるアプローチ2、アプローチ3の実際と考察(令和4年10月6日)

(7) 実際

展開段階でのアプローチ2において、生徒が自分の課題や考えを伝えることができるようにするために、傾聴の約束を確認した。生徒Aはその後の相談活動で、ストレスを感じている生徒Bの話に丁寧に聞き、自分なりの対処法を伝えて役に立とうとする姿がみられた(資料2)。終末段階でのアプローチ3では、友達の役に立てたと感じたことを自己評価する場面を設定するとともに、生徒が互い

のよさを認め合えるように付箋を配付した。生徒Aは、友達の役に立つことができたと感じた自分の行動にチェックを入れたり、「できるだけ分かりやすく教えられた。」と貢献できたことを振り返ったりしていた。また、相談に乗ったことへの感謝の言葉が書かれた付箋を友達から受け取っていた（資料3）。



資料2 互いの考えを伝える活動の様子

友達の役に立てたと感じたこと	認めてもらったこと
<input checked="" type="checkbox"/> 友達が困ったり、悩んだりしている話を、最後まで真剣に聞いたこと。 <input checked="" type="checkbox"/> 友達のストレスの対処方法について自分の考えを出したこと。 <input checked="" type="checkbox"/> ストレスの対処方法について、友達が理解できるように、例えや理由をつけて分かりやすく伝えようとしたこと。 <input type="checkbox"/> その他	相談に乗ってくれてありがとう 気持ち軽くなったよ〜 <div style="text-align: right; border: 1px solid black; padding: 2px;">B</div>
<input checked="" type="checkbox"/> 役割を果たすために、特に力を入れたことを教えてください。 詳しくはできるだけ分かりやすく教えられたこと	

資料3 生徒Aの活動の振り返り

(イ) 考察

生徒Aは、貢献の自己評価で自分の行動を振り返り、友達の話をもっと真剣に聞いたことや、対処法について自分の考えを出したことを貢献の行動であると自覚して、友達の役に立てたと感じていた。これらのことから、アプローチ2で互いの考えを伝えるペア活動を位置付け、アプローチ3で貢献を自己評価できるようにしたことは、貢献を実感できるようにする上で有効であったと考える。また、生徒Aは、友達から感謝の言葉が書かれた付箋を受け取り、授業後に「付箋をもらって役に立てたと知ってとても嬉しかった。」と答えており、他者からの感謝の言葉を前向きに受け止めていた。これらのことから、アプローチ3で、互いのよさを付箋で伝え合う活動を位置付けたことは、承認を実感できるようにする上で有効であったと考える。

ウ 実証授業Ⅱにおけるアプローチ2、アプローチ3の実際と考察（令和4年10月20日）

(ア) 実際

実証授業Ⅰを終え、実証授業Ⅱでは、生徒が自他の協力が必要な運動を行うペア、グループ活動を位置付けた。展開段階でのアプローチ2において、ペアでのボール運び、ペアやグループでの縄跳び、グループでの台風の目の運動を設定した。それぞれの運動において、「大丈夫かな。」「もうすぐ曲がるよ。」と声をかけて複数の友達と関わり、協力する姿が見られた（資料4）。



資料4 自他の協力が必要な運動の様子

他者の役に立てたと感じたこと	認めてもらったこと
<input checked="" type="checkbox"/> 友達が運動を楽しめるように積極的に運動に参加したこと。 <input checked="" type="checkbox"/> 運動が上手くいくように、友達に動きを合わせたり、声をかけたりしながら運動に取り組んだこと。 <input type="checkbox"/> その他	日かくしめっちゃん こわかったも〜 Thank you!
<input checked="" type="checkbox"/> 友達の役に立てるように、特に力を入れたことを教えてください。 あまり体も疲れないように声をかけました。	

資料5 生徒Aの活動の振り返り

資料4 自他の協力が必要な運動の様子。終末段階でのアプローチ3では、友達の役に立てたと感じたことを自己評価する場面を設定するとともに、生徒が互いのよさを認め合えるように付箋を配付した。生徒Aは、友達の役に立つことができたと感じた自分の行動にチェックを入れたり、「あまり怖く思わせないように声かけをした。」と記述したりしていた。また、運動の感想と感謝の言葉が書かれた付箋を友達から受け取っていた（資料5）。

(イ) 考察

生徒Aは、貢献の自己評価で自分の行動を振り返り、友達が運動を楽しめるように運動に参加したことや友達に声かけをしたことを貢献の行動であると自覚して、友達の役に立てたと感じていた。これらのことから、アプローチ2で自他の協力で成立する運動を行うペア、グループ活動を位置付け、アプローチ3で貢献を自己評価できるようにしたことは、複数の友達と関わりながら貢献を実感できるようにする上で有効であったと考える。また、アプローチ3で付箋をもらった時の気持ちとして、「気持ちを丁寧に言ってくれたので嬉しかった。」と答えており、他者からの感謝の言葉を前向きに受け止めていた。このことから、アプローチ3で、互いのよさを付箋で伝え合う活動を位置付けたことは、承認を実感できるようにする上で有効であったと考える。

エ 実証授業Ⅲにおけるアプローチ2、アプローチ3の実際と考察（令和4年10月28日）

(ア) 実際

実証授業Ⅱを終え、実証授業Ⅲでは、生徒が分担して学習した知識を伝える活動を位置付けた。展開段階でのアプローチ2は、学習した知識を伝えることができるように、伝達シートを活用し

説明	①「巧みな動き」を高める運動の説明をします。 ②名前を「グループパス」と言います。 ③実際にやってみます。→ 示範 ④これを「秒(「5」回×「2」セットやると…)」 ●飛らかさの例:「体が飛らかくなります」など ●巧みさの例:「ドライブングよく動けるようになります」 ●同時に二つのことを行うことに慣れてきます(「秒」など) ●力強さや動きを継続させる方の例: 「心拍数が『 』回程度まで上がって持久力が高まります(筋力が高まります)」など ⑤この運動で注意することは ボールをちゃんと見る ふざけないこと に気を付けてください。 ⑥自分の体力に応じて 回数を減らす のような行い方もかまいません。 ⑦では、実際に「5」回「 」秒やってみましょう。
----	---

資料6 生徒Aの伝達シート

てセリフを準備させた(資料6)。生徒Aは巧みな動きを高める運動を担当し、体力に応じた行い方をグループのみんなに説明して、責任を持って役割を果たそうとする姿が見られた(資料7)。終末段階でのアプローチ3は、友達の役に立てたと感じたことを自己評価する場面を設定するとともに、生徒が互いのよさを認め合えるように付箋を配付した。生徒Aは、友達の役に立つことができたと感じた自分の行動にチェックを入れたり、「分かりやすく話すために、言葉遣いに気を付けた」と記述したりしていた。また、3人の生徒から生徒Aが担当した運動への前向きな感想と感謝の言葉が書かれた付箋を受け取っていた(資料8)。



資料7 他者にとって新たな知識を伝える活動の様子

他者の役に立てたと感じたこと	認めてもらったこと
自分自身が担当して学習した知識や運動を他のグループに伝えることができたこと。	グループが楽しかった ありがとう
友達に丁寧に運動を教えたり、励ましたりしたこと。	フーカールー たのしかったー
友達の体調や体力の違いに応じて声をかけたり、強度を調整した運動の仕方を伝えたりしたこと。	チームプレーの楽し 楽しい運動ができた
口その他	
友達やグループの役に立てるように、特に力を入れたことを教えてください。 分かりやすさのために言葉遣いも気をつけた。	

資料8 生徒Aの活動の振り返り

(1) 考察

生徒Aは、貢献の自己評価で自分の行動を振り返り、自分が学習した知識を丁寧にグループに伝えることができたことを貢献の行動であると自覚して、友達の役に立てたと感じており、授業後アンケートにおいても「友達に難しい説明ができた。」と答えていた。これらのことから、アプローチ2で分担して学習した知識を伝えるグループ活動を位置付けたことは、自分の役割に責任を持つことにつながり、アプローチ3で貢献を自己評価できるようにしたことは、貢献を実感できるようにする上で有効であったと考える。また、アプローチ3で複数の他者から付箋をもらって、「嬉しかったです。」と答えており、複数の他者からの感謝の言葉を前向きに受け止めていた。このことから、アプローチ3で互いのよさを付箋で伝え合う活動を位置付けたことは、承認を実感できるようにする上で有効であったと考える。

(4) 全体考察

本研究の主眼の達成度、貢献や承認の意識や、貢献感、承認感の変容について考察する。

本研究の実証授業は、主体的に学習に取り組む態度を主眼として設定し、全ての生徒が主眼を達成することができた。このことから、「コネクション3」を位置付けた授業を通して、保健体育科で目指す生徒の姿に迫ることができると考えた。

次に、貢献や承認の意識の変容について、事前調査で貢献感、承認感の数値が低かった生徒Cは、今までの自分について、貢献の意識が低かったことを振り返っているが(資料9)、本研究の実証授業では、貢献の見通しを持って授業に臨んでいた(資料10)。

今までは、人の役に立ちたいなはあまり考えてなかった。でも、保健体育の授業を通して人の役に立つ場面があって他の人に自分のしたことか認められて嬉しかった。

資料9 生徒Cの振り返り

ストレスの対処の授業では、相手の相談をしっかりと聞いて、アドバイスをすることによって役に立ちました。

用具を使った運動では、声をかけたり、手助けをしたりすることによって役に立ちました。

体の動きを高め合う運動では、担当した運動を友達に伝え、分かるまで丁寧に教えてあげようとする中で役に立ちました。

資料10 生徒Cの実証授業Ⅰ～Ⅲの振り返り

生徒Cのように、実証授業前と比べて貢献や承認の見通しを持って授業に臨むようになった生徒は11%(3人)から71%(20人)に増加した。このように、生徒が貢献や承認を意識して授業に臨むことができるようになったのは、導入段階にアプローチ1を位置付けたことにより、本時の学習の見通しとともに、貢献や承認の見通しを具体的に持たせることができたことが要因であると考えられる。

次に、貢献感については、授業後のアンケートにおいて、生徒A、1年C組ともに事前調査と比べて向上するとともに、90%（25人）の生徒がアプローチ2の活動で役に立てていると感じたと回答した（図3）。この結果は、アプローチ2の活動が貢献の視点を意識した内容であったことや、アプローチ3のチェックリストによる自己評価により、自分の行動が他者の役に立つ行動であったことを自覚することができたことが要因であると考えられる。また、生徒Dのように、アプローチ3で友達から認められることで、貢献を実感した生徒もいた（資料11）。これらのことから、アプローチ2と3を位置付けたことは、生徒が貢献を実感できるようにするために有効であったと考える。次に、承認感については、生徒A、1年C組ともに事前調査と比べて向上した（図4）。生徒の振り返りには「認められて嬉しい」「また役に立とうと思った」などの記述があり、付箋に書かれた感謝や称賛の言葉を、全ての生徒が前向きに受け止めていた。このことから、アプローチ3で認め合う活動を位置付けたことは、承認を実感できるようにしたり、貢献の意欲をもたせたりする上で有効であったと考える。

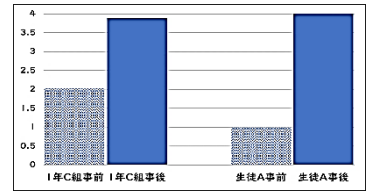


図3 貢献感の変容

今までは、自分がどんな存在が考えたことがありませんでしたが、今は、嬉しく認められて自分が役に立てた感じられました。

資料11 生徒Dの振り返り

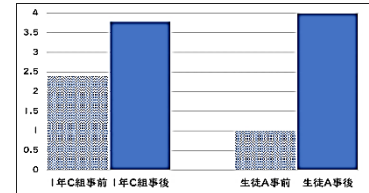


図4 承認感の変容

生徒Aは、実証授業の振り返りで、友達の役に立てたことに達成感を感じ、友達から付箋で認められた喜びを記述していた（資料12）。この記述は「他者のために役立った、認められたという自己有用感」の実感を表すものであることから、一単位時間に「コネクション3」を位置付けることは、自己有用感を実感することができる生徒を育む上で有効であったと考える。また、生徒Aは、実証授業を通して、いない方がよいと思っていた自分を付箋が救ってくれたと振り返っている（資料13）。このことから、他者の役に立ったり認められたりする授業をつくることは、生徒Aのように、孤独を感じて自分に自信が持てない生徒の存在感を育んだり、生徒にとって「また受けたい」と思える授業づくりを推進したりするうえで重要な意義があると考えられる。

生徒Aは、実証授業の振り返りで、友達の役に立てたことに達成感を感じ、友達から付箋で認められた喜びを記述していた（資料12）。この記述は「他者のために役立った、認められたという自己有用感」の実感を表すものであることから、一単位時間に「コネクション3」を位置付けることは、自己有用感を実感することができる生徒を育む上で有効であったと考える。また、生徒Aは、実証授業を通して、いない方がよいと思っていた自分を付箋が救ってくれたと振り返っている（資料13）。このことから、他者の役に立ったり認められたりする授業をつくることは、生徒Aのように、孤独を感じて自分に自信が持てない生徒の存在感を育んだり、生徒にとって「また受けたい」と思える授業づくりを推進したりするうえで重要な意義があると考えられる。

前は、(例) 出入のために動いたけど、入るために動いたことはそうありませんでした。でもこの授業を受け、一人一人を大切にするという決意をしました。しかし、ぼくには大しかな友達がいまいません。それが、Bさんでした。ペアになれて、うれしいのに、さらに黄色い付箋ももらい、保健の授業が楽しくなっていました。友達の役に少しだけ立てたら、達成感がきました。嬉しかったです。

承認感を味わい、授業を楽しみにしている。 貢献感とともに達成感を味わっている。

資料12 生徒Aの実証授業全体の振り返り

前は、ぼくが居ない友達に心算は変わらないと思っていました。むしろ居ないほうが都合がいいかと思いはじめて、孤独感が増してしまいました。そんな僕を救ってくれたのが黄色い付箋です。友達の素直な気持ちが伝わりました。特に多かったのが「Thank you」という言葉が多かったです。自分も友達からまた助けられてないと思っ。特に相談活動で自分が悩んでいた時に、ぼくが考えたのが「自分は別にいらなくてもいい」と思いました。

資料13 生徒Aの自己の存在についての振り返り

(5) 研究の成果と今後の課題

ア 研究の成果

- 一単位時間に生徒が他者の役に立とうとする活動と互いのよさを認め合う活動を位置付けることは、自己有用感を実感できるようにするために有効であった。

イ 今後の課題

- 本研究を通して、登校回避感情が低下することを期待していたが、今回の実証授業だけでは生徒Aの登校回避感情に改善が見られなかった。今後、貢献と承認を実感することができる授業を他教科に広げ、継続して実践していく必要がある。

<引用文献>

- 1) 文部科学省(2022) 『生徒指導提要』 p.14

<参考文献>

- ・ 文部科学省(2022) 『生徒指導提要』 p.46
- ・ 国立教育政策研究所(2012) 『生徒指導リーフ いじめの未然防止Ⅱ』

【添付資料】

1 評価規準と評価方法

	貢献感	承認感
目標	自分の行動が他者の役に立ったと実感している。	他者の役に立った自分が認められていることを実感している。
評価規準	他者の役に立つことができたと感じた自分の行動にチェックを入れたり書き出したりしている。	他者からの称賛や感謝の言葉を前向きに受け止めている。
評価方法	<ul style="list-style-type: none"> ・学習プリントにおける記述 ・授業中の様相観察 ・授業後のアンケート ・振り返りの記述 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習プリントにおける記述 ・授業中の様相観察 ・授業後のアンケート ・振り返りの記述

2 実証授業の展開

(1) 実証授業Ⅰ【心身の機能の発達と心の健康】

- ・欲求やストレスとその対処について、習得した知識や技能を自他の生活と比較したり活用したりして、心身の健康を保持増進する方法やストレスへの適切な対処の方法を選択することができる。 【思考・判断・表現】
- ・他者の相談を聞き、他者の考えの参考になるようにストレスへの適切な対処方法を提案しようとする事ができる。 【主体的に学習に取り組む態度】

	学習活動・内容	○指導上の留意点
導入 3分	1 本時の見通しとめあてを確認する。 ・相談活動の必要性 めあて 相談活動を通して、ストレスへの適切な対処法を選択しよう。	○ 授業で大切にしたい三つのことを確認し、ストレスの相談活動を含む本時の内容について、貢献や承認の見通しをもたせるようにする。 ①失敗を大切にしたい ②人の役に立とうとする ③友達の頑張りやよさを認める
展開 35分	2 相談活動の行い方を確認する。 (1) 相談活動の留意点を把握する。 ・聞く(相談を受ける)時の留意点 (2) 教師による相談活動のロールプレイを見学する。 ・具体的な聞き方や話し方 3 互いのストレスを相談する。 ・ストレスやその対処法についての他者との比較 ・相談活動による心の変化 4 自分のストレスへの適切な対処方法について、選択する。 ・自分や周囲の状況、友達の意見を参考にした上での選択	○ 安心してストレスの話をしたり自分なりの対処法を提案したりすることができるように、傾聴の約束を確認する。 ○ 自他の健康に関心を持つことができるようにするために、互いの考えを伝えるペア活動として、互いのストレスに対して、自分なりの対処法を伝える場面を設定する。
終末 12分	5 学習をまとめる。 まとめ ストレスについて相談することで、ストレスへの最適な対処法の選択肢を広げ、最終的な自分の対処法についての考えを深めることができる。 6 自他の学び方を振り返る。 ・自分が頑張ったことや友達のよかったところ	○ ストレスを一人で抱えないことの大切さに気付かせるために、相談して気付いたことや学んだことを記入させる。 ○ 自他のよさについて振り返らせるために友達の役に立てたと感じたことをチェックリストで自己評価させるようにするとともに、友達の活動中のよさを付箋に書いて認めさせるようにする。

(2) 実証授業Ⅱ【体づくり運動】

- ・用具を用いた運動には、心と体の関係や心身の状態に気付いたり、仲間と積極的に関わり合ったりするねらいがあることを理解できる。 【知識・技能】
- ・用具を用いて行う運動で、仲間と関わったり、仲間の学習を援助したりすることができる。 【主体的に学習に取り組む態度】

	学習活動・内容	○指導上の留意点
導入 5分	1 本時の学習の見通しとめあてを確認する。 ・用具を使った運動についての見通し 〆あて 用具を使った運動には、心と体、関わり合いについてどのような良さがあるのか見つけよう。	○ 授業で大切にすることを確認し、協力して運動を行う本時の内容について、貢献や承認の見通しを持たせるようにする。 ①失敗を大切にすること ②人の役に立とうとする ③友達の頑張りやよさを認める
展開 30分	2 心と体の状態を学習プリントに記入する。 ・心と体の状態の把握 3 ペアやグループで協力する用具を使った運動（ペア縄跳び、ボール運び、台風の目）を行う。 ・ペア、グループ活動での積極的な関わりによる心と体の状態の把握	○ 仲間の学習を援助しようとすることができるようにするために、互いの協力が必要な運動を選択し、台風の目では、目隠しを使用して、より友達を意識した働きかけができるようにする。
終末 15分	4 学習をまとめる。 〆あて 用具を使った運動には、楽しさを感じたり、体が軽くなったり、友達と絆を深める良さがある。 5 自他の学び方を振り返る。 ・用具を使った運動を通して、頑張ったこと、友達の良かったところ	○ 本時の活動における心と体の関係を振り返ることができるようにするために、学習プリントで、運動前後の心と体の状態を比較させるようにする。 ○ 自他のよさについて振り返らせるために、友達の役に立てたと感じたことをチェックリストで自己評価させるようにするとともに、友達の活動中のよさを付箋に書いて認めさせるようにする。

(3) 実証授業Ⅲ【体づくり運動】

・体の動きを高める方法では、ねらいや体力の程度に応じて、適切な強度、時間、回数、頻度などを考慮した運動の組合せが大切であることを理解できる。 【知識・技能】

・ねらいに応じた行い方などについての話し合いにおいて、分担した役割を果たそうとすることができる。

【主体的に学習に取り組む態度】

	学習活動・内容	○指導上の留意点
導入 5分	1 本時の見通しとめあてを確認する。 ・運動計画作成についての見通し 〆あて 体の動きを高めるための運動を交流し、自分の体力に合った運動計画を作ろう。	○ 授業で大切にすることを確認し、分担して学習したことを伝える本時の内容について、貢献や承認の見通しを持たせるようにする。 ①失敗を大切にすること ②人の役に立とうとする ③友達の頑張りやよさを認める
展開 30分	2 分担して学習した運動を伝え合い、運動計画を立てる。 ・体の動きを高める方法 ・ねらいや自分の体力に応じた運動の組合せ 3 体の動きを高めるための運動計画を交流する。 ・自他の体力と運動の行い方の違いへの気付き	○ 分担した役割を果たすことができるようにするために、分担して学習した運動を伝える場面を設定し、伝達シートを活用させて、確実に運動を伝えることができるようにする。
終末 15分	4 学習をまとめる。 〆あて 自分の体力に合った運動計画を立てるには、効果の目安を決めて、回数やセット数を調整するとよい。 5 自他の学び方を振り返る。 ・用具を使った運動を通して、頑張ったこと、友達のよかったところ	○ 運動計画作成について考慮したことに気付かせるために、分かったことや気付いたことを記入させるようにする。 ○ 自他のよさについて振り返らせるために、友達の役に立てたと感じたことをチェックリストで自己評価させるようにするとともに、友達の活動中のよさを付箋に書いて認めさせるようにする。

